『雅言集覧』の用例における『源氏物語』の扱い

平井　吾門

0　はじめに

『倭訓栞』『俚言集覧』とともに近世の三大国語辞書として知られる『雅言集覧』は、語釈を最低限にする一方で多量の用例を掲出することから、「辞書というよりは古語用例集に近」い（『日本語学研究事典』（明治書院、２００７）などと評価されてきた書物である。しかし、用例第一主義と言える『雅言集覧』について、肝心の用例選定基準に関して従来の研究で詳述したものは管見の限り見られず、他の研究も緒に就いたばかりの段階にあると言えよう。[1]『雅言集覧』については、『国語学辞典』（東京堂出版、１９５５）で築島裕氏が示した「収集範囲が広く、古代国語のほとんど全語彙を網羅して」いるという見解が、現行の概説書等にまで継承されているという状態にある。

『雅言集覧』の編者である石川雅望（１７５４～１８３０）が『源氏物語』を中心に国学をものしていたことや、『雅言集覧』が『源氏物語』研究の蓄積を発展させて編まれた書物であることは夙に指摘されているが、[2]数ある源氏語彙の中でどのような語句が『雅言集覧』に取り込まれているのか、ということについては未解明である。そこで本稿は、『雅言集覧』における『源氏物語』の語彙および用例の選出状況について、調査報告を行う。

石川雅望は、狂歌師や戯作者として活動する傍ら、前述の如く『源氏物語』を中心とした古典研究に勤しんだ国学者であり、『雅言集覧』以前には『源氏物語』の注釈書である『源註余滴』を著している。『源註余滴』は、契沖『源注拾遺』の影響を強く受け、『湖月抄』に対して全巻通じてさらなる注釈を加えるという類の書である。言うまでもなく雅望が源氏研究で培った蓄積は『雅言集覧』に流入していると考えるのが自然であり、その傍証として『雅言集覧』で『源氏物語』の用例を引く際は、『源註余滴』同様に『湖月抄』の丁数が明示されている。石川雅望が『源氏物語』を強く意識していたこ

とから、『雅言集覧』における『源氏物語』の用例の詳細な調査は、雅望の用例観や辞書観を導くために有効であると考えられるのである。

筆者はこれまで、『雅言集覧』の編纂過程において、先行辞書である『倭訓栞』の編纂方針が強く意識されていることの蓋然性の高さを論じ、両書を含めた近世国語辞書を複合的に調査・考察していく必要性を指摘してきた。[3] その際、古辞書及び古典籍の代表として『倭名類聚抄』及び『小倉百人一首』を利用し、『雅言集覧』では重要典拠の中で『倭訓栞』に採録されていないものを積極的に採録していく傾向があることを示している。[4] 本稿では、『雅言集覧』における『源氏物語』の扱いを押さえつつ、『倭訓栞』との対照から考察を加え、『雅言集覧』の用例選定基準の一端を解明することを目的とする。

1　『源氏物語』を典拠とする用例

本稿では、次の2調査の結果と、そこから導かれる考察を示していく。

① 日本語歴史コーパス（ＣＨＪ）および『日本古典対照分類語彙表』を利用し、『雅言集覧』において『源氏物語』語彙がどの程度取り込まれているのかを確認する。[5]

② 『雅言集覧』における『源氏物語』の用例について、相関関係が認められる『倭訓栞』において掲出された用例との比較を行う。

用例調査には、江戸版本（国立国会図書館デジタルコレクション収録、請求記号８３７・７９）を用い、異同の目立つ明治活字本は参照にとどめる。[6] また、調査範囲としては、『雅言集覧』冒頭の「い」部に絞ったサンプル調査を行う。本調査の有効性を示すとともに、今後の基礎調査の拡充につなげるためである。

まず、「い」部における『源氏物語』を典拠とする用例（以下、源氏用例とする）について、すべて抜き出すと次のようになる。当該範囲において源氏用例を含む見出し項目は706あり、親見出しが279項目、子見出しは427項目である。「い」部の項目総数は、親見出し子見出しを含めて２０００余りであるため、20％程度の項目で『源氏物語』の用例が含まれることになる。

なお、『雅言集覧』の親見出しと子見出しについて、これまでの調査で親見出しには数多くの典拠が載せられる一方で、子見出しには用例が少ないという傾向が認められる。そのため、源氏用例の調査においても、両者を区別する必要がある。親見出しと子見出しの体裁の差異を示すため、各々の項目において『源氏物語』を含む用例がどれくらいあるかを確認しておくと、親見出しでは平均２・９７個の用例、子見出しでは１・６１個の用例が引用されており、

規模の差は明確である。以下、必要に応じて見出しの種別を明記する。

	項目数	平均用例数
親見出し	279	2・97
子見出し	427	1・61

次に、日本語歴史コーパス（CHJ）を用いて、『雅言集覧』の源氏用例が『源氏物語』の中でどの程度出現する項目であるのかを確かめていく。当該範囲全項目の20％で源氏用例が見られるということは、典拠としての『源氏物語』が意図的に取捨選択された結果であり、源氏語彙全体の中でどのような用例が取り込まれたのかを探ることで、その意図に迫るためである。基本的な検索方法は、『雅言集覧』に示された語形を文字列や語彙素の掛け合わせによって絞り込んでいくものである。なお、石川雅望が『雅言集覧』を編む際に用いた『源氏物語』は『湖月抄』であり、「CHJ」で引かれる小学館新日本古典文学全集本と一致するわけではないため、適宜文脈から用例を探るとともに本文を比較するものの、全体として概略を示すことを目的としている。全706項目の内、23項目では『源氏物語』本文の異同が見受けられたが、[7] 概ね『雅言集覧』の見出し項目から検索可能であると言える。

注意が必要なのは、『雅言集覧』見出し項目が必ずしも『源氏物語』にそのままの形で現れるわけではない、という点である。例えば、『雅言集覧』「いふかひあり」（宿木56、浮舟18）や「いふよしなく」（賢木26、匂宮10）の項目は、[8] 実際には「いふかひあり」（宿木）「いふかひもある」（浮舟）、「いふよしなき」（賢木）「いふよしもなき」（匂宮）という形でそれぞれ現れるため、単純には検索できない。また、数は少ないが『雅言集覧』において「蓬生」と「末摘花」を混同するといった典拠名の誤謬も見られる。

これらをふまえて、まず『雅言集覧』において源氏用例が一つだけ掲げられている項目を確認する。源氏用例が一つである項目は、「いろにて（子見出し）」（竹川15）や「いろくさ」（野分1）など、計527項目（親見出し179、子見出し348）ある。その内、「CHJ」を用いた調査で『源氏物語』に一例しか用例が見られないものは、244項目（親見出し87、子見出し157）であり、残りの項目は他に用例がある中で一つを選り抜いていることになる。

また、「CHJ」に見られる全用例が『雅言集覧』の示す用例と一致しているものは、次のようになる。[9]

「CHJ」に1例のみ見られる項目	250
「CHJ」に2例見られる項目	22
「CHJ」に3例見られる項目	8

この中で、「CHJ」が掲げる用例3つと全て一致する用例を載

せている8項目について、具体的に示すと次のようになる。（なお、『源氏物語』の巻名は『雅言集覧』に取り上げている順に並べてある。）

いかゞはせんに　空蟬8、蓬生21、総角38
いたや　夕顔18、夕顔38、賢木4
いといたし（子見出し）若紫2、野分14、真木柱17
いづちも〳〵　玉鬘16、若菜下62、夕霧65
いつかしき　玉鬘24、少女46、御法16
いでばえ　帚木11、若菜下45、葵8
いでぎえ　若菜下19、行幸4、東屋52
いかれる（子見出し）紅葉賀27、帚木16、常夏25

これを見れば、『雅言集覧』では特定の巻の調査に留まらず、『源氏物語』全体から広く語句を採集していることは明白である。『雅言集覧』と「ＣＨＪ」が完全に一致するのは基本的に上記の計277項目であるが、

いぶかしく（子見出し）夕顔9、若菜上22、横笛11、紅葉賀22
いう（優）　帚木5、手習64、葵29、絵合18、若菜下34

のように、「ＣＨＪ」に見える6例中の5例を『雅言集覧』が示す例、あるいは同じく5例中の4例を示すものもある。手作業で『源氏物語』を総覧していることから当然見落としも存するであろう状況の下、『雅言集覧』では『源氏物語』における出現例の少ない語句について、可能な限り取り込もうとしている姿勢が見られるのである。

2　『古典対照分類語彙表』との比較から

『雅言集覧』では、『源氏物語』において用例数の少ない項目を取り上げていただけではない。ここでさらに、他の古代古典作品には見られない『源氏物語』特有の語彙であり、なおかつ『源氏物語』においてただ一例しか用いられていない語句について検証する。そのために、近年の研究成果である『日本古典対照分類語彙表』を利用し、従来の研究で度々指摘されてきた『雅言集覧』の編纂態度を補綴したい。[10]『日本古典対照分類語彙表』の中で、『源氏物語』以外には用例が示されておらず、なおかつ『源氏物語』にただ一例のみ用例を載せるものは、「い」から始まるものに限定すれば139項目ある。この中で、『雅言集覧』との対応関係を示すと次のようになる。

①『雅言集覧』に見出し（親・子）が立てられるもの　61項目
②見出しにはならないが用例で触れるもの　3項目

いたはりのぞむ　『雅言集覧』「いたはり」
いひちらしゐる　『雅言集覧』「いひちらす」
いそがしいづ　『雅言集覧』「ただいそがしにもいそがし」
③『雅言集覧』に一切見られないもの　75項目

③から明らかなように、『源氏物語』に一例しか見られない語句について、その半数以上が『雅言集覧』では触れられていない。ただし、その内実を見ると「いまだし（未）」を除けば残りの全ては「合成語」であるため、『雅言集覧』に立項していない事実は見出し語句認定の問題として処理できる。『雅言集覧』に見られない③の項目も、合成語を構成する単純語のレベルでは全て『雅言集覧』に収められているからである。また、上記②のように、見出し項目としては認定せずとも、「いたはり」といったより包括的な見出し項目の中で、用例として取り上げられるものもある。ここではむしろ、『源氏物語』特有の語彙で『源氏物語』にただ一例のみ用例を載せるものについて、その半数近くが『雅言集覧』の見出し項目として立てられていることに注目すべきであろう。石川雅望が、『源氏物語』に登場する全ての語句を分析し、古典研究の中で源氏特有語彙を意識していたことは明らかである。また、源氏特有語彙の中でも、『源氏物語』において出現回数の少ない語句については、特に積極的に収録していった蓋然性が高い。

3　『源氏物語』に多数用例がみられる項目の扱い

では逆に、『源氏物語』において多数用例が見られる項目について、どのような選定基準で立項していったのかということを考えたい。

まず、『雅言集覧』「い」部に登場する源氏用例について、『源氏物語』の巻ごとの分布の変遷を見てみる【表1】。上述の通り、「い」部には706項目が存しているが、それらに見られる『源氏物語』の用例を巻ごとに分類すると、【表1】「「い」部全て」の欄のごとくになる。巻ごとにムラはあるものの、「篝火」の0例を除けば全巻にわたって広く用例採取が行われていることが分かる。[11] また、1節で示した『雅言集覧』所収の源氏用例が「CHJ」と全て一致している280項目（のべ321巻）について、同様に『源氏物語』の巻ごとに分類すると【表1】「「CHJ」一致項目」の欄のごとくとなる。そして、「CHJ」と完全には一致しなかったものが、右端の【表1】「「CHJ」一致以外」欄に掲げてある（426項目（のべ661巻））。

【表1】

巻名	「い」部全て	「CHJ」一致項目	「CHJ」一致以外
桐壺	47	9	38
帚木	92	25	67
空蝉	15	4	11
夕顔	82	15	67
若紫	49	9	40
末摘花	35	12	23
紅葉賀	22	7	15
花の宴	7	1	6
葵	26	11	15
賢木	24	5	19
花散里	1	1	0
須磨	16	5	11
明石	23	9	14
澪標	20	5	15
蓬生	26	10	16
関屋	5	2	3
絵合	9	4	5
松風	19	2	17
薄雲	4	1	3
朝顔	6	0	6
少女	22	4	18
玉鬘	38	14	24
初音	9	3	6
胡蝶	5	3	2
常夏	8	5	3
蛍	6	5	2
篝火	0	0	0
野分	8	5	3
行幸	12	5	7
藤袴	4	1	3
真木柱	8	6	2
梅枝	4	2	2
藤裏葉	8	4	4
若菜上	31	13	19
若菜下	24	11	13
柏木	10	0	10
横笛	7	2	5
鈴虫	7	1	6
夕霧	18	10	8
御法	6	4	2
幻	8	4	4
匂宮	5	2	3
紅梅	6	2	4
竹川	12	4	8
橋姫	9	3	6
椎本	9	2	7
総角	20	8	12
早蕨	4	1	3
宿木	17	8	9
東屋	32	9	23
浮舟	45	16	29
蜻蛉	17	10	7
手習	30	15	15
夢浮橋	3	2	1

ある語句に対して『源氏物語』に見られた全用例を示す「一致項目」では、当然その分布は『源氏物語』における語句の出現箇所に依拠することになる。それに対して、「一致以外」の項目では、語句がありさえすればどの巻からでも柔軟に選択できるはずである。

実際に、最初の方の巻である「桐壺～末摘花」辺りを除けば、用例の採取される巻に大きな偏りは見られない。むしろ、特定の巻に拘らず、満遍なく用例を採取する様子が見えてくる。

そして、「桐壺～末摘花」に用例が偏っているのは、『雅言集覧』において初出例を探ったためであると考えられる。「CHJ」に挙げられた用例と完全には一致しない項目のうち、121項目（のべ211巻）において、その項目が『源氏物語』において初めて現れた例が挙げられているのである。『源氏物語』全編を通じて繰り返し出現するような汎用性の高い語句について、初出例を探った場合に最初の方の巻に分布が偏るのは当然のことであろう。『雅言集覧』において、必ず初出例が挙げられるというわけではないが、複数用例がある場合に初出例を選択するという傾向があったことは認められる。

また、そのような初出主義を補うかのように、上述の121項目の中で初出例以外に掲げられた用例は、「行幸」以降の巻に広く浅く分布していることが確認できる。【表2】は、『雅言集覧』が『源氏物語』における初出例を取り入れた項目について、初出例を含むそれぞれの用例の巻ごとの分布を示したものである。これはすなわち、初出例を示した項目で他にも用例を挙げる場合には、後半の巻から適宜選択していったということを示す。

【表2】初出を入れた項目の巻毎の分布

巻名	巻毎の数	巻名	巻毎の数
桐壺	23	野分	0
帚木	32	行幸	1
空蟬	3	藤袴	1
夕顔	28	真木柱	1
若紫	9	梅枝	0
末摘花	8	藤裏葉	0
紅葉賀	8	若菜上	6
花の宴	1	若菜下	3
葵	6	柏木	2
賢木	7	横笛	2
花散里	0	鈴虫	1
須磨	2	夕霧	2
明石	5	御法	0
澪標	6	幻	0
蓬生	5	匂宮	2
関屋	1	紅梅	2
絵合	0	竹川	3
松風	4	橋姫	1
薄雲	0	椎本	2
朝顔	2	総角	0
少女	8	早蕨	1
玉鬘	13	宿木	1
初音	0	東屋	4
胡蝶	0	浮舟	2
常夏	0	蜻蛉	1
蛍	0	手習	2
篝火	0	夢浮橋	0

以上の考察から、『雅言集覧』では、全体として54帖の中でバランスを求めた用例採取を行っていたということが出来よう。

4　『倭訓栞』との関係

最後に、『雅言集覧』における『源氏物語』の用例と『倭訓栞』における『源氏物語』の用例との比較を試みる。

『倭訓栞』は、先行書物から多数の用例を引用していることで定評があるものの、典拠を明示しないことも多い。そのため、「実証的である」と評されることが多いものの、その実証性は不完全であるとも言える。一方の石川雅望は、『雅言集覧』以前に著した随筆『ねざめのすさび』において、用例を何より重視する姿勢を示している。「とのゐもの、衣」の項目では、

河海抄に、殿上宿直人の名字書たる簡、号日給簡を納る袋歟としるし給ひしは、大なる誤なるよしは、既に先達もいへり。さてこの袋は、俗にいふ番袋なり、と契沖のいへり。されどたしかなる証文をひかず。

のように述べた後に『宇津保物語』を長文引用し、「此文にてよくしらるゝこそ」と締めている。内容如何ではなく、それを支える用例が無ければ主張を認めないという実証主義の極致を示していよう。[12] このような方針をとる雅望に編纂された『雅言集覧』は、典拠を明示しない『倭訓栞』とは大きく様相を異にする書物である。しかし、前掲拙稿で示したように、『雅言集覧』の立項態度には『倭訓栞』を意識した様子が窺える。そこで、本節では、先行する『倭訓栞』の源氏用例が『雅言集覧』の用例選定に影響を及ぼしたという見通しの下、両者を比較する。

石川雅望が利用した『倭訓栞』は、時代的な制約から整版本前編の巻28までであることが分かっており、写本の類や中編・後編といったものは閲覧していなかったことも発表者の調査で明らかとなっている。[13] この範囲において、『雅言集覧』の本調査範囲と重なる整版本前編巻3「い」部を用いて、両書を比較していく。

『倭訓栞』前編「い」部では、『源氏物語』の名を挙げて言及する項目は次の16項目である。『源氏物語』に触れた箇所をそれぞれ示し、引用箇所には傍線を引いてある。

(1) いかき　源氏にいかきさま又たけくいかきなとふは猛をよめりいかしに同し

(2) いかけ　源氏物語に火取をさといかけ……とみえたり

(3) いがたうめ　源氏に見ゆ伊賀専の義抄に狐をいふといへり

(4) いきざし　源氏にいきざしけはひなと見えたり

(5) いきぶれ　源氏に見ゆ觸穢をいへり気觸の義成へし

(6) いちはやし　源氏物語にいちはやき世又后の御心いちはやくてといひ

(7) いつきむすめ　源氏に見ゆ

(8) いぬ　源氏にいぬる十日なといふは今いふ去ンぬるなり

(9) いぬき　源氏に童の名にも見えたり

(10) いびき　源氏物語にいびきとか聞しらぬ音と見えたり

(11) いへとじ　源氏物語にも見えたり家刀自の義なり家なる女をいふ

(12) いまだ　源氏物語に山の桜はまださかりにてといふ類

(13) いますがり　源氏にいますからふやとも見ゆ細流にまします也との義とせり

(14) いまゝゐり　源氏物語に今まゐりくちをしからぬなめりと見えたり

(15) いもうと　源氏に見えしは同腹也……源氏にあこからせにしいもうとゝ書けるは姉をさせる詞なりいもせの義より出てたる語成へし猶かの男以女称妹といへる古語の遺れる觀つへし

(16) いりあや　源氏に見ゆ舞の終の手也といへり細流に舞有取綾手故云入綾とも見えたり或は入調をよめり

これらの記述を『雅言集覧』と適宜比較していく。

(1) の「いかき」については、『雅言集覧』でも親見出し「いかき」を立て、「アラ〳〵シク　タケ〳〵シキ也」という語釈と、『舒明紀』『万葉集』の用例を示した後に、「いかきもの」「いかきひたふる心」「いかきさま」の3子見出しを立てている。子見出し「いかきもの」では『宇津保物語』を1例引き、「いかきひたふる心」「いかきさま」ではそれぞれ『倭訓栞』に引かれた箇所と同じものを文脈とともに引用する。『倭訓栞』と対応する箇所に傍線を付して示せば、次のごとくである。

いかきひたふる心　源あふひ十八　かの姫君とおほしき人のいときよらにてある所にいきてとかく引まさぐりうつゝにも似すたけくいかきひたふる心出て打かなくるなと云々

いかきさま　同てならひ六　め鬼にやあらんとむくつけきをたのもしういかきさまを人に見せんと思ひて云々

(2)「いかく」について、『雅言集覧』では親見出し「いる（沃）」

の中に子見出し「いかく」として立項する。同子見出しでは『枕草子』及び『源氏物語』が1例ずつ引用される。『源氏物語』の用例を示せば次の通りである。

いかく　源まきはしら十五　俄におきあがりて大きなるこのしたなりつる火とりをとりよせて殿のうしろによりてさといかけ給ふほど云々　○俗にいふ　アブセル也

その他、(4)「いきざし」、(6)「いちはやし」、(8)「いぬ」、(10)「いびき」、(13)「いますがり」、(14)「いまゝゐり」の各項目についても、同様に『雅言集覧』では『倭訓栞』と同じ個所を文脈とともに引用している。

(3)「いがたうめ」、(5)「いきぶれ」、(7)「いつきむすめ」、(11)「いへとじ」、(16)「いりあや」の各項目については、『倭訓栞』において文脈が示されておらず一見単純比較はできない。しかし、「いがたうめ」「いきぶれ」「いへとじ（『雅言集覧』では「いへとうじ」）」「いりあや」の各語は、『源氏物語』においてそれぞれ一例しか見られないものであり、「いつきむすめ」も『源氏物語』に二例のみ見られる語である。そのため、『雅言集覧』では、『倭訓栞』が言及した『源氏物語』項目について同様に触れつつ、そこで示されていない『源氏物語』の文脈を補強していることになる。

(9)「いぬき」については、『雅言集覧』では立項していない。これは一般名詞とは認めがたいものをどのように扱うかという立項態度の問題であろうが、詳細は未解明である。また、(12)「いまだ」についても、『雅言集覧』で立項はするものの『源氏物語』の用例は取り上げていない。尤も、『倭訓栞』では「略してまだともいへり」という語釈を示しており、「いまだ」ではなく「まだ」という文字列を含む用例が示されているが、無論『雅言集覧』「いまだ」の用例にはなり得ないため両者が重なることはない。また、(15)「いもうと」については、『雅言集覧』では全く異なる文脈の用例を示している。『雅言集覧』においては、妹を表す「いもうと」と姉を表す「いもうと」を別の親見出しとして次のように立項する。

いもうと　妹　常いふイモウト也　源はゝきゝ十四　わがいもうとの姫君云々

いもうと　妹　是は姉の事をいへり　仁賢紀（略）　はゝきゝ三十八　寝たりける声のしとけなきいとよく似かよひたればいもうとゝ聞給ひつ　同四十五　いもうとの君の事もくはしくとひ聞給ひぬ　○小君か姉うつせみの君の事也

以上のことを纏めると、次の【表3】のようになる。

【表3】　『雅言集覧』		『倭訓栞』		『雅言集覧』と『倭訓栞』の用例が重なる	「CHJ」源氏用例数
見出し項目	源氏用例数	見出し項目	源氏用例数		
いかきひたふる心	1	いかき	2	○	1
いかきさま	1				1
いかく	1	いかけ	1	○	1
いがたうめ	1	いがたうめ	−	−	1
いきざし	1	いきざし	1	○	1
いきぶれ	1	いきぶれ	−		1
いちはやき	2	いちはやし	2	○	3
いちはやく	1				1
いつきむすめ	2	いつきむすめ	−	−	4
いぬる十よ日	1	いぬ	1	○	1
×	−	いぬき	−	−	1
いびき	3	いびき	1	○	4
いますからふ	1	いますがり	1	○	1
いままゐり	3	いまゝゐり	1	○	6
−	−	いまだ	1	−	−
いもうと（妹）	1	いもうと	−	×	22
いもうと（姉）	2		1		
いへとうじ	1	いへとじ	−	−	1
いりあや	2	いりあや	−	−	2
			（「−」は比較不能なことを表す。）		

この【表3】において、『雅言集覧』と『倭訓栞』で同一の用例を挙げている箇所に「○」、異なる用例を挙げている場合には「×」を示す。また、『倭訓栞』が『源氏物語』で見られる全用例に（見出しだけでも）言及した項目に太枠を付してある。

そもそも、『倭訓栞』では、空見出しを含めて計296項目ある「い」部の見出し項目のうち、『源氏物語』に言及するのは上述の通り16項目に過ぎない。しかし、この16項目のうち9項目が、『源氏物語』において1ないし2例見られる全ての用例をカバーしている。また、他の項目も「いもうと」を除けば『源氏物語』には2～6例しか見られないものばかりである。もちろん、「いもうと」の用例数が特異であることと、『雅言集覧』が「いもうと」だけ異なる用例を挙げていることは、興味深い相関関係にある。

『源氏物語』研究に精力を注いだ石川雅望にとって、『倭訓栞』の示したこれらの源氏項目が、『源氏物語』において極めて登場回数の少ないものであることはすぐに把握できたはずである。『倭訓栞』では『源氏物語』を典拠として取り上げることが少ない中で、挙げている用例の大半は『源氏物語』の全用例を含むものであるという先行書物の現実を前にして、『雅言集覧』の編者石川雅望は何を感じたであろうか。その真意は分からないが、『雅言集覧』では『源氏物語』において用例数が少ない語句を重点的に取り込んでいるという結果だけが厳然として残るのである。

5　まとめ

『雅言集覧』は、見出し項目の立て方や配置の基準、編纂方針が見え難い書物である。

本稿では、『源氏物語』に着目しすることでその一端に迫った。『雅言集覧』については、このように個別の典拠に関する細かい調査の積み重ねで読み解いていくよりほかないのではないか、というのが現在の直観である。ただし、『雅言集覧』の内部徴証を探るだけでは、結局「なぜそのような編纂方針を採ったのか?」という疑問に次々とぶつかることになる。近世国語辞書を個々に観察した時には見え難い事象が、先行辞書との比較の中で解くほぐす糸口を現すということを考えてきたが、本調査を通じてもその有効性が確認できたと考えられる。無論、本調査は、全数調査を以て完成させる必要がある類のものである。調査の方向性を確認したうえで、引き続き精緻な用例採集をすることが課題である。

注

（1）『雅言集覧』研究を牽引してきたのは粕谷宏紀氏と荒尾禎秀氏の両氏であるが、詳細なデータの公表には至っていないのが現状である。

（2）『日本古典文学大辞典　第一巻』（岩波書店、１９８３）「石川雅望」の項目には、粕谷宏紀氏による解説で「国学の研究は、とくに『源氏物語』を取り上げ、講筵を開いたりし、これが『源註余滴』『雅言集覧』といった注釈書や雅語用例書の基礎となった。」と書かれている。

（3）平井吾門（２０１８）「『雅言集覧』に見られる『倭訓栞』への意識　―百人一首歌および『倭名類聚抄』の扱いを通して―」（『国語と国文学』95 - 2）

（4）平井吾門（２０１９）「『雅言集覧』の散文用例試論」（「近代語研究」21）では、『雅言集覧』において『源氏物語』を補う形で『枕草子』が大きな役割を果たしていることも述べた。

（5）国立国語研究所（２０１７）『日本語歴史コーパス』バージョン 2017.9 https://chunagon.ninjal.ac.jp/および宮島達夫・石井久雄・安部清哉・鈴木泰（編）『古典対象分類語彙表』（笠間書院、２０１４）を用いた。

（6）荒尾禎秀「『雅言集覧』と俗語」（「清泉女子大学紀要」58、２０１０）では、明治期刊本と江戸刊本との差について「文字レベルでの違いがいささかあるが、項目の出入りや、文レベルでの相違はないようである。」としているが、発表者はこの点についてより慎重な扱いが必要であるとの認識を持つ。注４文献参照。

（7）「いろにいだす、朝顔の花に、いとなん、いともかしこき、いぬる、いかさまにか、いとなみいづ、いづれとなく、いづれの時、いづれも〳〵、いづくも、いつまでかは、いられず、いかまほし、いまはのかぎり、いまやうの事、いまさら、いませば、いぶかしく、いふやう、いきわかる、いひあへず、いひあかす」の各項目。そのほか、「いでゐ、でゐ、庭のいさご」の

３項目では「ＣＨＪ」と『雅言集覧』で読み方が異なる。

（８）数字は『雅言集覧』で示された『湖月抄』の丁数である。

（９）本文の異同により、『雅言集覧』を核にした場合と数値に若干のずれが生じている。

（10）荒尾禎秀（２０１１）「『雅言集覧』の漢語」（坂詰力治編『言語変化の分析と理論』、おうふう）では、『古典対照語い表』（宮島達夫、笠間書院、１９７１）を用いて『雅言集覧』に見られる漢語を調査している。

（11）なお、「ＣＨＪ」を見れば「篝火」巻にも用例は散見されており、「い」部においてそれらを採取していない積極的な理由は、現時点では見つかっていない。

（12）注２引用文献参照。

（13）注２引用文献参照。

その他参考文献

粕谷宏紀（１９８５）『石川雅望研究』（角川書店）

付記

本稿は２０１７年10月22（日）第117回訓点語学会研究発表会（於・東京大学文学部一番大教室）での発表内容に基づきます。会場でご意見を賜った先生方に感謝申し上げます。また、本研究はＪＳＰＳ科研費ＪＰ１７Ｋ１３４６０の助成を受けたものです。

（ひらいあもん　本学准教授）